

【第二弾】 神山威氏の講演内容の誤りについて (後編)

神山威氏は、二〇一四年六月十八日、韓国・釜山で開催されたUCI(別名・郭グループ)での集会において講演をし、その後も韓国各地での講演会で、天(天)国経典『天聖經』の批判、真のお母様に対する批判、および後継者問題などについて自説を語り、統一教会員の一体化を損ねる分裂行動をしました。神山氏はそれにとどまらず、日本でも同年九月二十一日に東京、同二十三日に名古屋、同二十六日に福岡で講演会を行い、同様の批判を繰り返し述べ、教会内部に混乱を引き起こさせる分裂行動を取っています。

既に【第一弾】「神山威氏の講演内容の誤りについて」(前編・後編)を掲載しましたが、今回は、東京での神山氏の講演および会場で配布された資料に基づき、その問題点を指摘いたします。なお、誌面の都合上、文字数の制限があるため、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」をごらんください。(教会成長研究院) 注・本文中、神山氏の講演内容は「茶色」で、真の父母様のみ言は「青色」で色分けしています。

(一)「三度目の結婚式は成されず」の批判について
神山氏は、真のお父様が、第三次の「聖婚式」を成すことができなかつたと決めつけて、次のように批判的に述べます。

「神様の結婚式がなされなければならなかつた。お父様が蘇生、長成、完成と最後の神様の結婚式を真のお父様がどんなにその時を待ったと思います? 2013年の1月13日の基元節を……」

目の前から展開されています (同、七月一日号、二〇一三ページ)

真のお父様は、この「最終一宣言」の後で、「人類はすでに蕩滅復帰時代圏を抜け出した」(これから「神様と真の父様を中心とした勝利圏の太平聖代だけが永遠に続くようになるでしょう」と言われ、「私たちはすでに神様の直接主管圏時代に進入している」(同、二〇一一年一月号、一ページ)とも語っておられました。

真の父母様は内的・実質的な三度目の結婚式である「最終一宣言」を成し遂げておられる前に、「完成、完了」したと宣言され、「天地人父母様時代」が到来していると言われています。

ておられたのです。

以上のように、真のお父様は「蕩滅復帰時代圏を抜け出し」、全てを「成し遂げた」と宣言され、「再臨主としての使命」を全うされました。ところが、神山氏は「お父様が……どんなに無念だったと思います? モーセもカナンを地を見ながら入れなかつた」と述べ、カナンの地に入れなかつたモーセと同様、真のお父様も失敗したと言わんばかりの主張をします。

神山氏は、真のお父様が「最終一宣言」を成し遂げたと言われ、「完成、完了」したと言われたそのみ言を信じていないようです。

「基元節」の式典では、外的・実体的な「神様の結婚式」である三度目の結婚式が成されました。まず、式典で、文善進様・朴仁洙様ご夫妻が真のお父様のための紫のローブと聖冠を、お

しかしお父様が待ちに待ったその日を迎えられず霊界に行かれました。どんなに無念だったと思います? モーセもカナンの地を見ながら入れなかつた」(神山氏の「配布資料」四八、五〇ページ)

神山氏は、真のお父様が第三次聖婚式を成せず、「お父様が待ちに待ったその日を迎えられず霊界に行かれました。どんなに無念だったと思います?」と語ります。

しかし、真の父母様が歩まれた「生涯路程」を注視しなければなりません。真の父母様は、米国・ラスベガスにおいて、二〇一〇年天曆五月八日(陽曆六月十九日)と同年天曆五月十五日(陽曆六月二十六日)の二日間にわたり、真の父母様の「最終一宣言」を宣言しておられます。この「最終一宣言」が持つ摂理的な意義は重大です。

この「最終一宣言」の勝利

父様の「宝座」におさげされることで、神様と完全一体となつておられるお父様が壇上において神様と共に待たれておられ、その「宝座」に向かつて、真のお母様が、結婚式で共に行進する「花童」である四人のお孫様を従え、パーズンロードをゆっくり歩いていかれました。

その際、結婚式に登壇する三十八人の介添人がパーズンロードに並び、真のお母様の行進を見守っていました。このようすは結婚セレモニーそのものです。これは、既に真のお父様と真のお母様が「最終一宣言」を成し遂げておられたがゆえに、行うことのできた結婚セレモニーです。そして、壇上の中央のバラの花のレリーフの所にある「宝座」に座られたとき、お父様とお母様の外的・実体的な三度目の結婚が成立したのです。

そして、真のお母様は、完成した真の父母様として「即位式」をされ「天一国」を宣布されま

圏のうえで、真の父母様は、同年天曆五月二十七日(陽曆七月八日)、韓国・天正宮博物館で「天地人真の父母定着実体宣言宣布大会」を開催され、その後、全世界に向かつて「最終一宣言」を宣布していかれました。このみ言は、「先生が生涯全体の結実として宣布したみ言です」(『トゥデイズ・ワールドジャーナル』二〇一一年三月一日号、一一ページ)と言われるものでした。

「すでに真の父母様ご夫妻は最終一宣言を成して、完成、完了の基準で、全体、全般、全権、全能の時代を奉獻宣布されたのです」、「人間始祖の墮落によって引き起こされた……歴史的な葛藤と闘争も、ついに天地人真の父母様によって、完全に解決されました。万人が平等であり、万国が兄弟国になって、『ワン・ファミリー・アンダー・ゴッド』の世界が皆様の

した。

天一国時代を迎えた私たちは、真のお父様が「私たちはすでに神様の直接主管圏時代に進入している」と語っておられたみ言を真摯に受け止めなければなりません。

(三)真のお母様は、「お父様と一体化していない」という批判に対して

神山氏は、ラスベガスで目撃した出来事について語り、真のお母様が、真のお父様に従わずに逆らい、真の母としての勝利基準を立てておられないかのようについて述べ、次のように批判します。

「ラスベガスで責任者を集めての訓読会がありました。そこに七十から八十名の人たちが集まっておりました。……そのとき、お母様はお父様の隣の席に座っておられました。

『どこに行くんだ、ここにいらんだよ』

『トイレに行ってください』

『ここにいなさい。糞でも小便でもここでしたらいい!』とお父様が怒鳴る!

でも振り切ってお母様は出て行かれました。お父様を振り切

って。私は本当に驚きました。

強いショックと衝撃を受けました。お父様が「お母様を早く呼んできなさい」と。一人の責任者がお母様を迎えに行きました。お母様が戻られないのでその人はお父様の所に戻ってくる

ことができません。また一人の人。そして一人の人を送ったのですが、誰も戻ってきません。お

父様が急に大きな声で『神山!!

お母様とお父様どどつちが正しい

なんだ! どつちが正しいんだ』

と聞かれたのです。……お父様は、お母様が来るのを待っている時間……本当に寂しそうです!』

このように、トイレに行こうとされる真のお母様に対して、お父様は「糞でも小便でもここでしたらいい」と語られ、それを振り切って出て行かれたお母様に対し、神山氏は「強いショックと衝撃を受けました」と述べます。

このような場面に遭遇したとき、さまざまな観点から深く考えさせられるでしょう。真のお母様は、その生涯路程において、いろいろな場面における「真の夫婦」の接し方、そのモデル的夫婦のあるべきお姿を、私たちに教示しておられるのだらうと思われま

神山氏は、「私は本当に驚きました。強いショックと衝撃を受けました」と自分の抱いた真のお母様に対する不信感を表明し、そして「お父様は、お母様が来るのを待っている時間……本当に寂しそうです」と主観的判断をもって、その感想を述べます。

しかしながら、真のお父様に五十年以上も連れ添い、いついかなる時においてもお父様を支えし、神様のみ旨成就のために献身してこられた真のお母様ほど、お父様を深く理解しておられるおかたは他にいらっしゃ

せん。真のお父様が、真のお母様と「最終一体」宣言をしておられる事実こそが、そのことを最も雄弁に物語っています。

真のお母様と四六時中、行動を共にしてもいない私たちに、いったい何が分かるのでしょうか。真のお父様ご自身が、真のお母様に対し、どのように受け止めておられるのか、その事実こそが重要です。お父様は、お母様に対して次のように語っておられます。

「アダムを中心として女性を創造した時と同じように、天の男性を中心として女性を再創造するので。個人的女性完成圏、

も、お母様一人のみ旨に何の支障もないのです。今までは、

女性が天地を代表する摂理の代表者として立つことはでき

なかつたのですが、父母の愛と一体的理想を中心として、初め

てお母様を中心とする女性全体の解放圏が地上に宣布されたの

です。それが、けさ行われた『女性解放圏』宣布の式典でし

た。……ですから、先生が一人

でいても真のお母様の代身であり、お母様が一人でいても真の

父母様の代身です。ですから、先生が第一教主、その次に、お

母様は第二教主だということですから」(同、一一五〜一一六ページ)

「お母様は私の影のようです。付いて回る影のようなので、私

は実体をもった主体の教主であり、お母様は対象の教主です。

それで、私は第一教主、お母様は第二教主です。何を中心として

ですか。愛を中心としてそう

だということです」(同、一一六

ページ)

「お母様を中心として皆さんが一体になっていかなければならない時が来りました。もう先生がいなくても、お母様が代わりにできる特権を許諾したということです。お父様がいないときは、お母様のことを思わなければなりません。そのように理解して、先生の代わりにお母様に侍る心もち、祈禱もそのようにするのです。今までは先生を愛してきましたが、これからはお母様を愛さなければなりません。……先生が第一教主であれば、お母様は第二教主であると世界的に宣布し、天地に宣布します」

(同、一一六〜一一七ページ)

「先生が霊界に行ったとしても、お母様が地上にいれば、霊界と地上界の統一圏ができるので、いつでもお母様が地上に来て一緒に暮らすことができ

家庭的な女性完成圏、民族的、民衆的、国家的、世界的な女性完成圏を代表した一人を中心として創造するのです。それを成し遂げてこられた方がお母様です。先生のあとにびびったりとくっついてきたのです」(『真の父母の絶対価値と民族的メシヤの道』七七ページ)

「お母様がサタン世界の最高クラスを中心に、巡回講演を通して八十力都市で勝利の覇権をもって戻ってきたので、お母様は、お母様としての責任を果たし、初めて神様が公認した位置、サタンが公認した位置、人類が公認した位置に立つようになりました。……それで、この場で文総裁がお母様に対して、韓鶴子女史に対して表彰するのです。ですから、これからは対等な位置に立ちます」(同、八七〜八八ページ)

「これからは先生がいなくて、お母様一人のみ旨に何の支障もないというのです」(同、一一七ページ)

このように、真のお父様は、「お母様が一人でも真のお母様の代身」、「お母様は私の影のようです」、「先生の代わりにお母様に侍る心もち……お母様を愛さなければなりません」、「いつでもお母様が地上にきて一緒に暮らすことができる」と語っておられます。

それほどまでに、真のお父様と真のお母様は一体になっておられるということです。お父様は地上に生まれ、お母様と一緒に暮らしておられると言われるのです。もし神山氏が、お父様を「愛している、信じている」と言われるならば、そのみ言をも信じなければなりません。

真のお父様は、二〇〇五年二月十四日の「天宙統一平和の王戴冠式」祝賀晩餐会のみ言で、後天時代(天一国時代)は「調和、協力、相応、和解、統一の時代」であると、次のように語

「『先天時代』は、対立、闘争、相克、不和の時代でしたが、『後天時代』は、調和、協力、相応、和解、平和、統一の時代です。『先天時代』には、葛藤を助長し、分裂を起こして支配しましたが、『後天時代』には、このようなことが、これ以上、許されなくなりません。和解と調和、平和、統一を志向する個人、集団、社会、国家が中心となって主導していく環境圏になります」(『ファミリー』二〇〇五年四月号、二二ページ)

神山氏の取っている「分裂行動」は、真のお父様を悲しませることであることを神山氏が早く悟り、お父様と一体となっておられる真のお母様を中心として、実体的な天一国創建に向け、兄弟姉妹と共に歩まれるようになってやみません。